

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年 3月21日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科・共生文明学専攻

職 名・学 年 教 授

氏 名 菅 原 和 孝

助成の種類	平成 24年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 研究成果物刊行助成		
研究成果物名	身体化の人類学——認知・記憶・言語・他者——		
著者・編著、作成者全員の所属・職・氏名	【編者】菅原和孝（京都大学・教授） 【著者】多数のため、別紙記載		
学術書・論文集等について	出版社・印刷会社等名	発行年月日	配布先
	世界思想社	平成25年4月20日	日本文化人類学会事務局（学会誌書評依頼）。京都大学生協書籍部および大型書店で販売のほか、関係学会の年次大会でも出店販売。
データベース等について	公開方法		公開年月日
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出（ご提示）下さい。		
会計報告	事業に要した経費総額	4,204,800 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) なし	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
	組版代	1,089,800	600,000
	製版代	451,000	0
	刷版代	192,000	0
	印刷代	500,000	200,000
	用紙代	494,500	100,000
製本代	386,500	100,000	
校閲経費	1,091,000	0	
合計	4,204,800	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 序論の他に、16篇の論文を擁する大部な専門書であり、通常の市販本としての出版は著しく困難であった。本助成により、文化人類学と関連分野の最先端の議論を広く世に問うことができたことに、深く感謝したい。		

成果の概要／菅原和孝

編集者：菅原和孝（京都大学・教授）

著者（執筆順）：

菅原和孝、木村大治（京都大学・教授）、森田真生（独立研究者）、亀井伸孝（愛知県立大学・准教授）、内堀基光（放送大学・教授）、岩谷彩子（広島大学・准教授）、鈴木貴之（南山大学・准教授）、大村敬一（大阪大学・准教授）、河合香吏（東京外国語大学・准教授）、長澤壮平（豊田市矢作川研究所・研究員）、高木光太郎（青山学院大学・教授）、青木恵理子（龍谷大学・教授）、藤田隆則（京都市立芸術大学・教授）、定延利之（神戸大学・教授）、松嶋健（京都大学・研究員）、石井美保（京都大学・准教授）、松田素二（京都大学・教授）、水谷雅彦（京都大学・教授）

成果の概要

本書は、平成 19 年度から平成 23 年度に交付を受けた日本学術振興会科学研究費補助金（基盤 A）「身体化された心の人類学的解明」（課題番号 20242026、研究代表者・菅原和孝）の研究成果の主要な部分をなす。本書刊行の目的は、文化人類学のフィールドワークを「身体化」という新しいパラダイムと結合させるところから生まれた学際的な共同研究の成果を公開することである。本書は、序論および 4 つの部に分かれ、各々が 4 つの章を含む、全 16 章で構成される。序論では、文化人類学において文化の本質を規則・知識・象徴といった心的な表象に還元する見方が主流を占めてきたことを批判し、メルロ=ポンティの現象学に源をもつ「身体化された心」と呼ばれる知の運動が文化人類学にもたらす意義と可能性を展望した。

第 I 部 認知と表象の身体化

第 1 章「数学における身体性」は、若い数学者たちの会話分析を通じて、抽象的思考の極である数学が身体性を通してしか捉えられないことを明らかにした。第 2 章「心は身体的にしか語れない」は、ボルネオのイバンが生きる「生活の具体性の論理」と広範な民族誌的な比較を結合させることによって、身体化の基礎理論を錬磨した。第 3 章「移動する身体・生成する場所」は、インドの移動民ヴァギリが想起する夢に現れる知覚や運動のイメージに注目し、身体が空間に位置づけられる軌跡を解明した。第 4 章「身体化された心は人類学を変えるか？」は、「心の哲学」の視点から、「身体化された心」という考え方は表象主義を乗り越えるのかを吟味し、批判的な見解を呈示した。

第 II 部 記憶と環境の身体化

第 5 章「交合する身体」は、カナダ・イヌイットの古老へのインタビューの分析から、過去の生業活動について語ることの核心が環境のアフォーダンスを開示するところにあることを明らかにし、大森荘藏が提起した反表象主義に有力な論拠を与えた。第 6 章「牧畜民チャムスにおける誕生と死」は、北ケニアの牧畜民チャムスにおいて、生の両端を社会的な絆のなかに据えて、調査者が身近に経験した誕生と死の特性を鮮明に記述

した。第7章「自然と文化を統合する神事芸能の身体」は、宗教学の視点からわが国の民俗芸能を代表する早池峰岳神楽を参与観察し、自然環境のリアリティに埋めこまれた営みとして神事芸能を捉えることの重要性を明らかにした。第8章「既知から既在へ」は、生態心理学の視野からフラッシュバブルメモリーの謎を解明し、記憶を流動として捉えるという視点から、想起に内在的に作用する「個的な体験」を照射した。

第Ⅲ部 言語と意味の身体化

第9章「過去の出来事への身体の投入」は、ボツワナ狩猟採集民グイの語りのなかで生じる身ぶりを民族誌的な文脈に据えて分析し、身ぶりの基本的な意味作用としての「指標性」と「類像性」を照らすとともに、語り手と聞き手が虚環境を共同探索し、身体を過去の出来事に投入する様態を明らかにした。第10章「声の汚染」は、インドネシア・フローレス島の二つの村で話される別々の言語に注目し、「声の身構え」と「声の身ぶり」という分析概念を用いて、二つの「声」の微妙な差異が異なった形の他者との関係を実現していることを明らかにした。第11章「日本の古典音楽・芸能における身体への集中」では、民族音楽学の視点から古典音楽・芸能を学習した著者自身の経験を吟味し、「具体的な型に集中せよ」という学習構造の仕組みを照らした。第12章「身体化された文法・言語の姿を探る」は、言語情報を共有可能性の程度に応じて「知識」と「体験」に二分し、文の自然さを説明する枠組として「体験の文法」を提案するとともに、「スタイルとキャラクタ」という新しい観点から言語の身体化を解明した。

第Ⅳ部 社会と他者の身体化

第13章「身体化された心からテリトリー化された心へ」は、医療人類学の視座から精神病院廃絶後のイタリアでの地域精神医療に注目し、それが地域の生活空間で「生きること」に定位する実践を生み出したことを解明した。第14章「パースペクティブの戯れ」は、南インドのブータ祭祀における踊り手の憑依の技芸を分析し、彼らが他者のパースペクティブを引き受け、自己のそれとのあいだを往還する様態を明らかにした。第15章「暴動を予防する身体」は、アフリカ諸社会を揺るがす暴動現象を再考し、「部族」または「持つもの／持たざるもの」の対立という表象主義的な枠組を乗り越え、身体直接経験に基づく世界認識の重要性を明らかにした。第16章「身体無きバーチャルリアリティは「悪」か」は、情報倫理学の立場から、「現実」のまがい物にすぎない「バーチャルリアリティ」へ耽溺することが生を貧困化すると難じる身体至上主義に対して、徹底的な反駁をくわえた。

仮想現実の無際限な精緻化に圧倒されている「今ここ」においてこそ、私たちは、直接経験に基づく世界把握と、表象主義的な世界認識のあいだの緊張関係をつねに五感を動員して測りなおす必要がある。